

1列王記2章1-4節「男らしく生きる」

1A ソロモンの王位

1B バテ・シェバの子

2B 若く、弱い子

3B 神に愛され、選ばれた者

2A 男らしさ

1B 現実の直視「世のすべての人」

2B 主に対する責任「主の戒めを守り」

1C 強められる

2C 目を覚ます

3C 信仰に堅く立つ

4C 戦い抜く

3B 神の約束「栄えさせよう」

本文

おはようございます、今日から新しい聖書シリーズ「列王記」が始まります。列王記は第一と第二に分かれています、元々は一つの書物です。そして、サムエル記に引き続き、イスラエルの王政の歴史になります。バビロンによってユダの民が捕え移されるまで、神はイスラエルを王によって治めてられました。午後礼拝では、1章と2章を学びたいと思いますが、今朝は2章1-4節に注目したいと思います。

1 ダビデの死ぬ日が近づいたとき、彼は息子のソロモンに次のように言いつけた。2 「私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。強く、男らしくありなさい。3 あなたの神、主の戒めを守り、モーセの律法に書かれているとおりに、主のおきてと、命令と、定めと、さとしを守って主の道を歩まなければならない。あなたが何をしても、どこへ行っても、栄えるためである。4 そうすれば、主は私について語られた約束を果たしてください。すなわち『もし、あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、精神を尽くして、誠実をもってわたしの前を歩むなら、あなたには、イスラエルの王座から人が絶たれない。』

ダビデがソロモンに、「強く、男らしくありなさい」と命じました。ダビデが死んでソロモンがイスラエルを治めなければいけません。間もなく指導者になる彼に必要な命令は、「強く、男らしくあれ」でした。

私たちがしばしば聞く言葉で、「少年よ、大志を抱け」というものがありますね。興味深いことに、日本人は歪曲してこの言葉を伝えてきました。この言葉を発したのはクラーク博士という人ですが、

彼は熱心なクリスチャンであり、北海道の農学校の学生をキリストに導き、それで彼らにこう語った言葉だったのです。「少年よ、キリストにあって大志を抱け。」そして、この命令に従った男たちで有名なのは、内村鑑三と新渡戸稲造です。新渡戸稲造は以前の五千円札になった人ですね。確かに、それぞれの持ち分でキリストにあって大志を抱き、この日本の舵取りを担いました。キリストにあって男らしく生きることは、神の命令です。

1A ソロモンの王位

ダビデがこの言葉をソロモンに語った背後には、権力闘争がありました。ダビデが年を重ねて老人になっていました。体もなかなか動かせない身になっており、次の後継者が誰か気になるころでした。そこでダビデの息子の中で、アドニヤが最も年上であったと考えられます。彼が「私が王になろう(1:5)」と考えたのです。そして、彼はかつてアブシャロムが行ったように、戦車、騎兵を用意し、自分の前に走る者を五十人用意しました。そして、ダビデの軍団長のヨアブ、祭司エブヤタルが何とアドニヤのほうに付きました。かつてアブシャロムにダビデの議官アヒトフェルが付いて行ったように、今、ダビデの王座を奪い取ろうとしていたのです。

アドニヤから相談を受けても付いて来なかった預言者ナタンの才気ある行動で、ダビデに今の王権転覆の動きを伝えることができ、ダビデは正式にソロモンを王位に着けることができました。その後で、ソロモンに今の言葉を伝えたのです。

1B バテ・シェバの子

人間的には確かに、ソロモンよりもアドニヤがダビデの座に着くにふさわしい人でした。理由はいくつありますが、その一つは、ソロモンがバテ・シェバから生まれた子であるということです。バテ・シェバの前に、ダビデの生涯で昔から妻であった女たちは数多くいました(2サムエル 3:2-5)。その中の妻で四番目に生まれたのがアドニヤでした。けれども、バテ・シェバははるか後に妻になった女です。しかも、彼女はダビデがウリヤから奪い取ったところの女であり、その子ソロモンは見下げられるにふさわしい息子であったはずですが。

2B 若く、弱い子

そしてもう一つは、ソロモンがまだかなり若い子だったということです。まだ十代だったと思います。彼が王になってから、主の前で「私は小さい子どもです。(3:7)」と祈りました。そんな若い子にどうしてこの大国を任せることができるか、アドニヤのほうかはるかに成熟していてその働きにふさわしいではないか、と人間的には思うわけです。ですから王の罪によって生まれた子であり、まだ若年です。私たちも、神に用いられる人を見るときに、そのような外見を見ることはないでしょうか？

3B 神に愛され、選ばれた者

しかし、ソロモンには最も大切な、いや唯一の、ダビデの後継者として選ばれる根拠がありました。ダビデとバテ・シェバとの間の初めての子はすぐに死んでしまいましたが、その後にダビデが

バテ・シェバを慰めました。その後でソロモンが生まれました。そして2サムエル 12 章 24-25 節にこう書いてあります。「主はその子を愛されたので、預言者ナタンを遣わして、主のために、その名をエディデヤと名づけさせた。」主が一方的にソロモンを愛されました。そこには理由はありません。その一方的な愛によって、神はソロモンをダビデの後継者としてお選びになったのです。そして、歴代誌第一 22 章 9 節に、神がダビデにはっきりとソロモンがダビデを継ぐ子として宣言しておられます。

使徒パウロがテサロニケの信者たちにこう話しました。「主に愛されている兄弟たち。神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、初めから救いにお選びになったからです。(2テサロニケ 2:13)」主が選ばれるのは、もっぱら愛によるのです。愛しているから選ばれるのであって、その人の内にふさわしい資格があるから、また経験があるから選ばれるのではないのです。けれども、主はご自分の選ばれた者には、確かにその働きをするに必要な能力と知恵を授けてくださいます。

2A 男らしさ

1B 現実の直視「世のすべての人」

ダビデはソロモンに初めに、「私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。」と言いました。これはもちろん、自分の死が近づいていることを話しています。これまでソロモンは、父ダビデの強い指導の下にいればよかったのですが、これからは自分自身で神の前に出て、王としてのあらゆる判断を下し、決断していかなければいけません。

「男らしさ」とは何かを考えますと、一つに、現実を見ることのできる人と言うことができるでしょう。何かをしようとする時に、果たしてそのことをする能力また気力があるのか、その現実をしっかり見据えてことを行いません。ある時にできても、この時にはできない、ということであれば、その人は責任を取ることができません。例えば、感情の起伏は私たちを行動へと動かせない妨げとなりえます。ダビデが、アブシャロムを失くして悲嘆に暮れましたが、ヨアブの叱責によって、民の前に出てきました。感情は付いていけなくても、自分が前に出て行かなければイスラエルの民がダビデに大いに失望して、二度と自分に付いて来なくなることを知ったからです。感情は付いてこなくても、状況をしっかりと把握しているのです。

2B 主に対する責任「主の戒めを守り」

そして、男らしさにおいて最も大切なことは、「主の命令に対して自分自身が責任を取る」ということです。ダビデが次にソロモンに言った言葉が3節です。「あなたの神、主の戒めを守り、モーセの律法に書かれているとおりに、主のおきてと、命令と、定めと、さとしとを守って主の道を歩まなければならない。あなたが何をしても、どこへ行っても、栄えるためである。」これは、モーセが死ぬ前にヨシュアにも与えた命令でした。指導者として何をしなければならないかと言えば、主が何と語られているか、それを聞き取って、ことごとく守り行っていくことでもあります。

興味深いことに、「かしら」とされているのは必ず男です。アダムとエバのことを考えてください。初めに禁じられた木の実を食べたのはエバでした。そしてエバに誘われて食べたのがアダムでした。ですから、エバが非を問われるはずなのですが、聖書ではアダムが罪を犯したから、世界に罪が入った、と教えています。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、..それというのも全人類が罪を犯したからです。(ローマ 5:12)」ひとりの人、というのはひとりの男、ということです。

その反面、エバは「惑わされた」という言葉が使われています。「また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました。(1テモテ 2:14)」エバではなく、アダムが神から直接、これを食べてはならない、食べたなら死ぬ、と命じられていました。エバは、アダムから神の命令を聞いただけです。ですから、罪を犯したのはアダムであり、エバは悪魔に惑わされたのですが、罪を犯したと書かれていないゆえです。もちろんエバはアダムを介してであっても、神の命令に背いているのですから罪を犯しています。けれども人の代表者として、やはり男が罪を犯したことになるのです。

これを知るのは、とても大切です。男らしさとは、他の誰かに依頼するのではなく、自分自身が神の前に出て、神の命令を聞き、それに従うことを意味します。「これこれ、このような理由だから、私はこの責務を果たすことはできません。」という言い訳はできないのです。そのような弁解をするなら、「主よ、どうか助けてください。あなたの御心であれば、このことを解決してください。」とまっすぐに祈ればよいのです。そのような男は、聖書の数多く出てきました。ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、ヨシュア、みなそうでした。自分の判断によって失敗して、その責任を取って、それをもって主の前にいつまでも出続けた者たちでした。

男ではなかったのは、例えばサウルです。主の裁きに甘んじることができず、いつまでも恐れ、逃げていました。イスカリオテのユダもそうでしょう。彼は悔い改めではなく、自殺を選びました。あれだけ大失敗したペテロはどうでしょうか？彼は男です。このような恥をも、主にあって言い開き、泣いて悔い改めました。

1C 強められる

他の箇所で、「男らしくなりなさい」という勧めがあるところを読みたいと思います。コリント人への手紙第一 16 章 13 節です。「目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。」ここに男らしくなるためのステップが二つ書いてあります。男らしくなって、強くなる、つまり主にあって強められるためのステップです。

2C 目を覚ます

一つ目は、目を覚ますことです。自分が、ちょうどソロモンのように大きな圧迫にいるかもしれません。そうすると、今いる状況ばかりが目に入り、自分の視点によって周りを見て、また自分自身

を見るようになります。けれども、それでは決して試練や誘惑に打ち勝つことができません。そこで必要なのは、主にとって今ある状況を凝視することです。イエス様のゲッセマネの園での祈りを思い出してください。間もなく捕えに来る者たちがいること、そしてそれが神の御心の中で行われていることを、イエス様はしっかりと見据えて心が整えられるために祈っておられました。すべてのことは神の主権の中にあります。全く主がおられるように見えない中で、実は主が働かれておられることを見ることができるかどうかを試されています。霊の目が与えられるように祈ることです。

3C 信仰に堅く立つ

そして二つ目は、「堅く信仰に立つ」ことです。目を覚ましていることによって見えてきた神の視点を、神の御言葉の約束によってしっかりと保っていることです。単に信仰に立つのではなく、堅く信仰に立ちます。神の約束に立って、決して動じないことです。この良い例は、前回の学びに出てきました。ダビデの三勇士です。ペリシテ人が群をなして襲ってきたときに民はみな逃げましたが、勇士シャマが畑の真中に踏みとどまって、民を救い、ペリシテ人を倒しました。

4C 戦い抜く 1テモテ1:18

そしてもう一つ見たい御言葉があります。テモテへの手紙第一 1章 18節です。「私の子テモテよ。以前あなたについてなされた預言に従って、私はあなたにこの命令をゆだねます。それは、あなたがあの預言によって、信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです。」

ここには男らしくなれ、という言葉は出てきませんが、テモテへの手紙全体が、男らしくなるための勧めに満ちています。「あなたにこの命令をゆだねます」というパウロの言葉が、司令官が部下に命令を下すのと同じ意味合いを持ちます。テモテは論争をする者たちがいて大きな問題が生じていたエペソの教会を任されていました。彼は気の弱い性格で、これらのことに強く対処することがひどく辛かったようです。そこでパウロは、彼が確かに神に召された奉仕者であることを、手を置いて祈った時に彼に預言の言葉が与えられたことを思い起こさせています。そして、今ここで読んだように、「勇敢に戦い抜きなさい」と命じているのです。

男らしくなるのに必要なのは、忍耐です。戦うのですが、それだけでは足りません。戦い抜くのです。相手は簡単に引き下がりませんが、それでもあきらめることなく戦いの剣を降ろすことはありません。これは、同じく前回の学びで、三勇士の一人がこんな状態でした。「自分の手が疲れて、手が剣について離れなくなるまでペリシテ人を打ち殺した。(2サムエル 23:10)」手が剣について離れなくなるまで戦い通したのです。

これまでの話を聞いて、男らしく生きることは、必ずしも女の人たちがしないことではないことはお分かりだったと思います。誰のせいにするともなく、また自分自身が単独で神の前に出て行くことは、男だけでなく女も行います。そして、目を覚ますことも、信仰に堅く立つことも、戦い抜くことも女もすることです。けれども、実際の働きにおいては男に神が担われることが多いです。

それに対して女性は、「従う」というところにその女らしさが出てくることを聖書は教えています。「女は静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。(1テモテ 2:11)」これも男も行うことです。神の置かれた権威に身を置き、静かに仕える姿は男にも必要です。けれども、権威をないがしろにし、責任は取らないけれども口を出すということはしばしば女性が犯す過ちであり、神が秩序として静かに従いなさいと命じています。そこに強い信仰の現われがあります。

3B 神の約束「栄えさせよう」

ですから、男らしくなり、強くならなければいけません、その勧めに従う時に、神は豊かな祝福を約束されています。ダビデはソロモンに、こう神の約束を伝えました。3 節後半から 4 節です、「あなたが何をしても、どこへ行っても、栄えるためである。そうすれば、主は私について語られた約束を果たしてくださる。すなわち『もし、あなたの息子たちが彼らの道を守り、心を尽くし、精神を尽くして、誠実をもってわたしの前を歩むなら、あなたには、イスラエルの王座から人が絶たれない。』」ソロモンは確かに、その統治によって神の栄えを手に入れました。次回から私たちは、ソロモンの栄華ある王国を見ていきます。

午後の学びでは、ソロモンが果敢に正義を執行していく姿を見ます。ソロモンに神の与えられた権威に対して挑みかかる人の動きに対して、彼は公正をもって裁き、罰しました。同じように、先ほど引用したパウロのテモテに対する手紙は、テモテに与えられた牧会者としての権威に挑みかかる、論争を引き起こす者たちに対して、しかるべき対処を取るようにパウロがテモテに命じているところです。そのことを成し遂げ、その戦いを最後まで貫けば、主の与えられている約束は永遠のいのちであると書いてあります。「信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。(1テモテ 6:12)」

皆さんにも今、信仰の戦いがあるかもしれません。大きな圧迫の中にいるかもしれません。ですから、主は今朝、ダビデがソロモンに与えた言葉の通りに命じておられます。「男らしくあれ。強くあれ。」と。主の前に勇気を出して出て行ってください。自分の置かれている環境の中で自己憐憫に陥るのではなく、主の前に勇気をもって出て行くのです。そして、現状を見つめてください。この現状は、神から来たものです。その現状に対して、神はふさわしい知恵と力を必ず与えてくださいます。そして、その神の知恵の中で絶えず目を覚まして生きてください。しっかりと立って、信仰を堅くしてください。そうすれば、必ず皆さんに栄えを与えてくださいます。永遠のいのちの意味をさらにまた深く知ることを神は許してくださいます。